

## 五、東山キャンパスへ

### ◆東山移転への願い

これまで見てきたように、名古屋大学が名実ともに総合大学となることを願う、大学関係者や愛知県民の熱意と支援よって誕生し、構成員が結束して教育・研究に取り組んでいた農学部ですが、やはり名古屋から離れた安城という立地条件による制約をまぬがれることはできませんでした。

「通学やアルバイトの不便はともかく、他学部との交流が難しいことは、総合大学の学部としての利点を生かせないということであり、教員と学生の大きな不満になっていました。他学部の教員や学生と交流することの重要性は、通信手段が発達していなかった当時、現在よりもさらに大きかったにちがいありません。他学部の講義や講演を自由に聴いたり、図書や実験器具を自由に利用したりしたいという願いは、安城キャンパスが生まれた当初からくすぶっていたようです。学生生活の重要な一環である部活動やサークル活動にしても、学部を超えた人的交流があつてこそ真価を発揮するといふものです。」

また、いずれ東山に移転するだろうという、ぼんやりとした前提のために、キャンパス整備がなかなか本格的化しないという不満もあつたことでしょう。前章で見た一九五九（昭和三四）年の伊勢湾台風は、こうした不満をあらためて浮き彫りにしたようです。

#### ◆名古屋大学整備計画における農学部

敗戦後、既存学部の復興と、新学部設置事業に追われてきた名古屋大学ですが、一九五〇（昭和二五）年になると、GHQ/SCAPの意をうけた文部省の指示もあつて、学長と部長から構成される整備計画委員会を設置し、第一期整備計画を策定しました。

この計画最大の目標は、医学部を除く各学部を東山キャンパスへ集結させ、総合大学としての実を上げることでした。しかし、農学部だけは安城キャンパスにおいて整備することとされたのです。もちろん勝沼精蔵総長も、農学部も東山で整備することが理想であるとの認識は持っていました。そこで問題となるのが安城市との関係でした。

第二章で見たように、敗戦後の困難な時代にあつて、莫大な経費や設備を必要とする農学部をあれほど早く創設できたのは、地元安城の全面的な協力があつてこそでした。ようやく実現したと思つたらすぐに移転の話では、安城市民や、まだ現職にあつた大見為次市長が納得しないことは明白です。したがって、移転の構想やプランはあつても公にはできず、勝沼総長が現

職に在る間は、移転話じたいが一種のタブーになっていたようです。

#### ◆移転計画の確定

農学部でも、増井清初代学部長や雨宮育作第三代学部長は、農学部設置委員会のメンバーでもあり、当時の経緯をよく知るだけに、勝沼総長と同じ思いを強く持っていたようです。

昭和三〇年代に入ると、農学部の若手教員を中心に、そういったタブーを破っても東山移転を実現しようという動きが出てきました。学部内の移転を要望する声を背景に、若手教員有志を中心に非公式な委員会が結成され、時には強引な行動もしたようです。その結果かどうかは分かりませんが、当時現職の中山博一農学部長の回想によると、一九五七（昭和三二）年一月の名古屋大学協議会で、勝沼総長が農学部の東山移転について言及したといえます。ただ、同年七月の評議会で承認された第二期整備計画案では、「農学部の所要建築は一般営繕費によることとし情勢が熟し諸準備の整い次第この計画に加える。」とされ、それがいつのことになるのかは、依然として不明なままでした。

これをうけて、整備計画委員会では、農学部を理学部の東北方面、すなわち現在の農学部の位置に移転させる構想が検討されましたが、これが公式のものとなったのは、やはり一九五九年に勝沼総長が辞任してからでした。またこの年には、創設当時の安城町長であった大見為次

市長も職を退いています。

そして六〇年六月の整備計画委員会において、五島善秋農学部長からの要請に応じ、移転計画を公表することが承認されたのです。

#### ◆キャンパス跡地の処遇と財源問題

しかし、創設当時の責任者が現職を退いたといっても、安城市の十分な理解を求める必要があったのは当然のことです。その結果、一九六一（昭和三六）年一二月になって、ようやく同市の承諾をえることができました。ただその後、跡地の処遇をめぐる問題が出てきました。

安城市は、もともとこのキャンパス用地は、戦前に安城町が寄付したもので、公共用地として利用したいと、無償返還を要望しました。松坂佐一総長もその方向で努力する意向を表明していましたが、農学部の整備委員会は、移転にともなう校舎建設費用の財源にあてるため、有償を主張しました。

結局、校舎建設費用は別の方法で予算化することになり、無償譲渡されることが決まりました。ここは現在、各種の運動施設をそろえた安城市総合運動公園になっています。

校舎建設費用の財源については、豊川農場を国に提供する代わりにそれに見合う予算を計上してもらおう方式が検討されました。しかしそれだけでは、農学部の設置要件である農場がなく



整地された農学部建設用地  
 (見えるのは本部と職員会館、『名古屋大学農学部30年史』より)

なつてしまいます。ただ運よく、愛知県愛知郡東郷村（現東郷町）にあつた農林省振興局研究部の試験地約二八万 $\text{m}^2$ が、愛知用水の完成とともに任務を終了してることが分かりました。当初農林省は難色を示しましたが、桑原幹根県知事や県選出国會議員の力添えもあつて、一九六二年三月に同地を東郷農場として取得することができました。現在でもフィールド教育支援センター東郷フィールド（旧大学院生命農学研究科附属農場）として存続しています。

#### ◆移転成る

こうして移転の制約となつていた問題が解決され、一九六二（昭和三七）年九月の整備計画委員会では、農学部の移転が正式に第三次整備計画に組み入れられました。ただし翌年度は、

名城キャンパスの文学部・教育学部・本部が東山へ移転することになっていたため、これが完了するのを待つてから、農学部に移転に着手することになりました。結局農学部は、医学部を除けば、創設につづいて東山終結も最後になったわけです。

東山キャンパスの新校舎は、一九六五年四月に着工され、翌六六年三月に完成しました。各研究室は二月に実験を打ち切り、三月に入試事務が終わると同時に移転の準備にとりかかりました。一五年間にわたって蓄積された設備・器具や教育資材、図書、書類などは膨大なものであり、荷物の梱包にのべ一四〇〇人、搬出にも一二〇〇人以上、二七〇台もの運送用トラックを必要としました。

#### ◆新しい農学部とその景観

新校舎の建築は、農学部の建築委員会が苦心し、諸外国の大学建築物の配置などを参考にし、それらの長所がとり入れられていました。この時に建築されたのは、現在でいえばA館西研究棟（一号館）、A館東研究棟（二号館、同年東側へ大幅に増築）、管理棟（三号館、一九七〇年に東側へ増築）、講義棟（四号館）ですが、それぞれを渡り廊下で結ぶ建築方式になっていることが特徴でした。これは、東山に移つても、安城時代と同じように構成員の結束をかたくしていこうという願いもこめられています。のちに建てられたB館（五号館・六号館）も、



東山移転当時の農学部全景（『名古屋大学農学部30年史』より）

同じように廊下などでA館とつながっています。そのほかにも、研究室や実験室などの床面積は安城時代の二倍以上となり、全館暖房システムやエレベーター、全館冷暖房完備の立派な図書館、充実した複写室など、当時としては最新の設備が取り入れられていました。

ただ校舎をめぐる景観はといえば、現在とは異なっていました。当時の農学部の敷地は山肌をけずり取ったままの状態であったため、雨の日はぬかるみ、通勤通学や学内移動は大変でした。敷地の周囲も、安城時代が田園風景であったとすれば、現在の東山は森林風景であるという当時の文章が残っています。また名古屋大学初の六階建てとなった研究棟の屋上からの眺めは、近辺の開発が十分に進んでいなかったこともあり、現在よりもさらに壮観であったようです。



現在の農学部（大学院生命農学研究科）  
全景（『名古屋大学農学部50年史』より）

#### ◆メタセコイアの移植

前章でふれた、第一回卒業生によつて植樹された三本のメタセコイアも、伊勢湾台風を生き残り、記念碑とともに東山キャンパスの今の場所に移植されました。植樹した当時は1m足らずであつたのが、一〇年あまりですでに一〇m近くになっていました。メタセコイアは丈夫で成長が早く、巨木になることも知られ、最初に中国で発見されたものは樹高が二九m以上であつたといっていますから、農学部のメタセコイアもさらに高くなつていくかもしれません。

二〇〇一（平成一三）年、名古屋大学農学部同窓会は、農学部創立五〇周年を機に会の愛称を募集し、その結果「セコイア会」とすることに決まりました。同窓会報も「セコイア通信」と呼ばれています。セコイアとメタセコイアは、厳密には別種の植物ですが、アメリカのセコイア国立公園にある、世界最大



の樹木といわれる樹高八三mのジャイアント・セコイアのイメージに加えて、長寿であるセコイアと農学部の住所である「不老」町をかけた意味合いもあるそうです。



現在のメタセコイア（中央）。後ろに見えるのは農学部A館西研究棟。